

特集

若手研究者が挑む

国際基準の エビデンス構築のための 実験研究 徹底解説

本誌では2004年、「看護実践につながる実験研究」と題する特集を組みました(37巻1号)。EBP, implementation researchなどが大きな潮流となっている現在, エビデンスを創りだす実験研究の重要性は, 一層高まっていると思われます。

その中で, 日本における実験研究はいまどのような状況にあるでしょうか。昨年の第40回日本看護科学学会学術集会において, 「看護実践における国際基準のエビデンス構築の試み——臨床での看護実践に生かせる実験研究をしよう」というテーマのもと, 意義ある交流集会が行なわれました。本特集では, この交流集会を企画し, 実験研究の成果を積極的に海外に発信してきた気鋭の若手研究者の先生方とともに, 改めて実験研究の基本から, 若手研究者としてのさまざまな経験まで, 多様な要素を織り交ぜながら徹底解説し, 実験研究の醍醐味と意義を見いだす特集企画を組むこととしました。

実験研究に取り組もうとしている若手研究者の方々を中心に, これまで長く実験研究に長く取り組まれてきた熟達の方々の研究者の方々も, そしてこれから研究者をめざす学生の方々なども, 研究のキャリアを超え, いま一度, 実験研究の重要性を見つめ直し, わが国における実験研究の活性化に向けた機運を共に醸成していくきっかけとなれればと考えています。

『看護研究』編集室

序

(山上優紀, 大村優華, 植木慎悟)

看護実践の経験知を理論知として科学に発展させていくには, 看護実践を科学として証明し, エビデンスを構築する必要がある。そのためには, 看護分野において無作為化比較試験などの介入研究をはじめとした実験研究を行なうことが不可欠である。しかし, 我々の調査によれば, 過去20年の国内外の主要看護系雑誌に掲載されている実験的手法を用いた論文は少なく, 特に国内においてその傾向が顕著であった。看護実践におけるエビデンス構築のためには今後, 実験研究を増加させることが重要な課題である。

実験研究は明確な研究課題(リサーチクエスション)の設定と緻密な手順(プロトコル)から成り立つ。そのため, 得られた結果は簡潔明瞭であり, 国際基準となる強固なエビデンス構築につながる。本特集では, 特に若手研究者の方々を主要な対象とし, 実験研究の基本的知識や方法を一から徹底解説する。あわせてこれまで筆者らが実施し, 海外(看護系)のトップジャーナルに採択された無作為化比較試験をはじめとする実験研究の実際を, 事例をまじえて紹介する。

実験研究の知識や技術を持っていなかった若手研究者の筆者らが悩み, 失敗し, 改良しながら構築してきた実験研究の方法を, 反省を交えながら読者の皆さんと共有したい。これから実験研究に挑もうとしている方, 関心を持たれている方のみならず, 本特集を契機に実験研究の重要性を喚起し, その裾野が広がっていくことを願っている。

【企画】

山上優紀 (奈良県立医科大学医学部医学科疫学・予防医学講座助教)

大村優華 (大阪大学国際医工情報センター特任助教)

植木慎悟 (九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野准教授)